

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

たまゆらの女 (ひと)

2003年・中国映画・93分

配給/日本ヘラルド映画

2003 (平成15) 年10月26日鑑賞

<梅田ガーデンシネマ>

Data

監督・脚本・製作：孫周 (スン・チ
ヨウ)

出演：鞏俐 (コン・リー) / 梁家輝
(レオン・カーファイ) / 孫
紅雷 (スン・ホンレイ)

👁️👁️ みどころ

雲南省の昆明と四川省の重慶を結ぶ、片道10時間の「火車」による長距離恋愛の主人公は、あの匂うような美しさのコン・リー。詩人につくす彼女の愛とそんな彼女を想い続ける若い獣医。三者三様の心の葛藤が火車の旅を軸として、悩ましくかつ官能的に描かれる。『花樣年華』と並ぶ、中国の現代版ラブロマンスの誕生に乾杯！

<コン・リー初の本格的ラブ・ストーリー>

この映画のポイントの第1は、何ともロマンティックな周魚 (チョウ・ユウ) : 鞏俐 (コン・リー) と陳清 (チェン・チン) : 梁家輝 (レオン・カーファイ) との「遠距離恋愛」。過激なセックスシーンはないものの、少しだけ見せてくれる激しいベッドシーンと映画の全編を通じて恋人に対して見せるコン・リーの表情が何とも言えず官能的。そして第2のポイントは、陳清に対していくら尽くしても満たされることのない周魚の姿を見つめ、そんな彼女に恋する獣医、張強 (チャン・チアン) - 孫紅雷 (スン・ホンレイ) の激しい片思いの気持ち、そしてこの「誘惑」に揺れ動く周魚の女心。

中国映画には珍しい本格的な官能的ラブロマンスを、私の大好きなコン・リーが色気タップリに演じている。

<周魚が住むちは雲南省の昆明>

周魚は中国最南部の、ベトナム・ラオス・ミャンマーに国境を接する雲南省の三明 (これは架空のまちで、実際は昆明と推測) に住む白磁器の染付け絵師。

昆明は雲南省のほぼ中央にある高原の都市。そのため年間平均気温が15度という穏や

かな気候に恵まれ、年間を通じて花と緑が絶えないため、「花の都」と呼ばれている。観光地として最も有名なのは、世界文化遺産に登録されている「石林」。これは昆明の東100 kmにある景勝地。また少数民族が多く、旅行ガイド本によると、華やかな衣裳をまとった美人揃いとのこと。私が「次回の中国旅行のターゲットに」と狙っているところだ。もっとも、この映画のロケ地は、昆明から更に南へ220 km下った建水というまちのことだ。

こんな高原のまち昆明に、美しい湖があった。その名は仙湖（実はこれも架空の名前）。周魚に恋した詩人陳清は、周魚に対してこんな詩を贈った。何とロマンティックで官能的な詩だろう。

我的仙湖

為了讓（イ尔）聽見我的话
有時候變得纖細
微風吹起（魚善）魚的冰裂

「僕の仙湖」

君に聞こえるように
小さな声でささやく
微風がかけらを吹き飛ばした

—

仙湖、陶酔的的青瓷
在我的手中柔軟得如同（イ尔）的皮膚
它溢出了我的仙湖
由于完全充滿

仙湖の美しい青磁
君の肌のように 柔らかく
僕の仙湖があふれる
水を満々とたたえて

こんな詩とこれを贈ってくれた詩人陳清に周魚はイチコロ。周魚はたちまち陳清と恋に落ちた。

<詩人の住むちは重慶>

他方、詩人の陳清が住む町は四川省のまち重慶（これも架空の名前で、実際は重慶と推測）。重慶は日中戦争時代、蒋介石率いる国民党の臨時首都になった地。

もっとも四川省の省都はそのほぼ中央にある「三国志」で有名な「成都」。そして成都は三国志の時代は、劉備、孔明、関羽、張飛等で有名な蜀の国の首都でもあった。

重慶は成都の南東にあり長江（揚子江）とその支流の嘉陵江（ジャ・リンジャンー）に挟まれた半島状の都市であるため、古くから水上交通で栄えてきたが1949年の新中国成立後は工業都市として急速に発展し、北京を抜き中国トップの人口を誇っている。

ちなみに、大阪にも北新地の御堂筋からの入口に、重慶飯店という中華料理店が長い間あった。

<原作は「チョウ・ユウの汽車」。そしてもう1人の主人公は「火車」>

この映画の原作となったのは、福建省出身の本名「ユアン・ホン」、ペン・ネーム「ベイ・ツン」の名で知られる作家が書いた「チョウ・ユウの汽車」という短編小説。この小説の中で描かれたのは、愛する男と会うために、週に2回、片道10時間をかけて、三明（昆明）から重陽（重慶）へ通う女性の姿。このロマンティックな題材に魅せられて、孫周監督が映画化したわけだ。

従って、この映画のもう1人の主人公は「火車」、つまり日本の汽車のこと。スクリーン上には何回も何回も、ゴォーと音を立てながら走る火車が登場し、これがストーリー展開の軸となっている。また火車の中での車掌と周魚との会話や、車掌と張強との会話の中で、いろいろな人物像がうまく語られていくのが面白い。つまり「火車」は立派なもう1人の主役となっているわけだ。

雲南省の昆明と四川省の重慶との間の距離は約1,100km。雲南省や四川省の面積だけでも日本列島全体の面積より少し大きい。

この映画では、片道約10時間という設定だが、パンフレットによると、中国の現実の時刻表によると約22時間かかるらしい。しかも中国の汽車は「硬座」。だから10時間の火車での旅は決して楽ではない。なぜ周魚はここまで陳清に魅せられたのだろうか・・・？

<孫周監督とコン・リーとの関係は・・・？>

孫周監督とコン・リーは北京中央戯劇学院の同窓生。孫周監督は、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『始皇帝暗殺』（1998年）で燕国の太子、丹の役で出演し、コン・リーと再会した。そして孫周監督は、翌年コン・リー出演で『きれいなおかあさん』（1999年）を監督し、コン・リーはモントリオール世界映画祭で最優秀主演女優賞を獲得した。『きれいなおかあさん』では、コン・リーはノーメイクで地味な母親役を演じたが、この『たまゆらの女』では、実に色気タップリの妖艶で魅力的な女性を演じている。孫周監督とコン・リーの間にはきっと何かある・・・と思うのは、「ゲスの勘繰り」、ではないと思うが・・・？

主人公の女性の妖艶な魅力、そしてこれを取り巻く2人の男たちというテーマ設定で有名な中国の名作は、マギー・チャン主演の香港映画『花様年華』（2000年）。あの映画でマギー・チャンが着たたくさんのチャイナ・ドレスの美しさは、忘れることができない。

『たまゆらの女』を編集したウィリアム・チャンや音楽を担当した梅林茂は、『花様年華』のスタッフそのままだ。

<女はなぜこんな軟弱な詩人に惹かれるのか？>

最初に陳清が周魚を見たのは、ある夜のダンスパーティーの席。そこで、赤いスカートを翻しながら踊る周魚に陳清が一目惚れしたのだ。しかし陳清が贈った詩と陳清の姿を見てイチコロになったのは周魚。

本に囲まれて過ごす元図書館員だが、詩を書くことが大好きな陳清は、この手の男に共通する、あまり生活力があるとは思えない「ヤサ男」。売れない詩を書き、自分の夢の中にひたり、現実の世界に立ち向おうとしない「軟弱な」男だ。

これに対して周魚は、白磁器に絵具でさまざまな絵を描くという、ある意味ではアーティストだが、気が強く、現実的で行動的な女性。陳清に会いたいと思えば、片道10時間の汽車の旅も苦にならないし、陳清が詩集を（自費）出版するためには、自分の全財産をつぎ込むこともいとわないという入れこみようだ。そして陳清はいつもこんな周魚の「迫力」にタジタジ。だから陳清は、周魚を迎え入れるための努力をするのではなく、逆に、ロクな仕事をしていない陳清に対してチベットへ行き教師になる途があることが伝えられるや、陳清は安易にその途に選択してしまった。必死にこれをくい止めようとする周魚。しかし陳清は1人遠いチベットへ旅立ってしまった。

<若い獣医の男は結構魅力的だが・・・>

毎週2回重慶へ通う周魚は火車の車掌さんの顔なじみ。そんな周魚に興味を示したのは若い獣医の男、張強（チャウ・チアン）。他の男に惹かれて、遠距離恋愛を続けている女でも、魅力的なものはどうしようもない。

また、なかなか手に入れることができないと思えば思うほど、手に入れたくなるのも恋愛術のイロハのイ。

張強は結構いい男だし、マメに周魚に対してモーションをかけるものの、いつもハネ返されるばかり。しかし、さすがの周魚も、陳清がチベットに旅立った後は心が乱れ弱気になった。そんな周魚はずっと自分を見つめてくれていた張強のもとに行こうと意を決して張強の家を訪ね、予定通りベッド・イン。しかし周魚の気持ちがまだ自分に向いてないことを知った張強の男心は、このような中途半端な気持ちでのセックスを認めることができなかった・・・。

<コン・リーは1人2役！>

スクリーンには、妖艶で魅力的そして2人の男の間で気持ちが揺れ動く女性周魚が主役として登場するが、他方、ショートカットでジーンズ地のシャツを着た現代的な女性、秀（シウ）も登場する。そしてこれはコン・リーの2役だ。

そう、この映画は、今は成功して有名な詩人となっている陳清の恋人の秀が、周魚のことを思い出して語っている物語なのだ。映画はさまざまな断片的なストーリーを繋いで、それらをショートカットで描いていく。従って時系列はあまり確かではない。周魚と陳清との遠距離恋愛。それは結ばれることのない一方的な愛だった。そして、そんな周魚に対して想いを寄せる張強の存在によって、周魚の気持ちは揺れ動いていた。

ある時スクリーン上には、交通事故によってバスが崖から転落するシーンが・・・。こ

れは一体何を意味するのか・・・？プロローグとエピローグのつくり方は実に印象的。

『花様年華』(2000年)と並ぶコン・リーの魅力いっぱいの本格的かつ現代的なラブ・ストーリーの誕生だ。

2003(平成15)年10月27日記